Excel による単純回帰分析

次のデータを分析する.

	A	В	С
1	Y	Х	
2	1	1	
3	4	2	
4	9	4	
5	15	6	
6	20	10	
7			

エクセルにおいて、メニューバーの「データ」→「データ分析」→「回帰分析」を選択す ると、次の画面が現れる. データ範囲, 出力範囲を設定し, 「OK」ボタンをクリックす る。

参考:EXCEL2003の場合は、メニューバーの「ツール」→「分析ツール」→「回帰分析」を選択すると、同様の画面が現れる。

回帰分析	5 ×
入力 Y 範囲(Y): \$A\$2:\$A\$6 入力 X 範囲(X): \$B\$2:\$B\$6 ラベル(L) 定数に 0 を使用(Z) 有意水準(Q) 95 %	OK キャンセル ヘルプ(出)
出力オプション ○ 一覧の出力先(S): ③ 新規ワークシート(P): ③ 新規ブック(W) #差	
○残差(B) ○残差グラフの作成(D) ○標準化された残差(T) ○観測値グラフの作成(D)	
正規確半 一正規確率グラフの作成(N)	

図中の「入力Y範囲」には、被説明変数、「入力X範囲」には説明変数を示す範囲を入 力する。ラベルには変数の名称をデータ範囲に含めて指定した際にチェックする。デ ータ範囲にラベルを含めていないのにチェックすると、分析結果が違ってくるので注 意する必要がある。出力先を指定したら、「OK」ボタンをクリックして、分析を行う。

実行すると、Excel は以下の分析結果を出力する.

	A	В	С	D	E	F	G	Н	Ι
1	概要								
2									
3	回帰	統計							
- 4	重相関 R	0.982995							
5	重決定 R2	0.966279							
6	補正 R2	0.955038							
7	標準誤差	1.652019							
8	観測数	5							
9									
10	分散分析表	E Č							
11		自由度	変動	分散	肌された分散	有意 F			
12	回帰	1	234.61.25	234.6125	85.96489	0.002655			
13	残差	3	8.1875	2.729167					
14	合計	4	242.8						
15									
16		係数	標準誤差	t	P─値	下限 95%	上限 95%	下限 95.0%	上限 95.0%
17	[0.070070	440444	1070000	446444	4 070363
	切片	-0.04687	1.293734	-0.03623	0.973373	-4.10411	4.070363	-4.10411	4.070303
18	切片 X 値 1	-0.04687 2.140625	1.293734 0.230877	-0.03623 9.271725	0.973373	1.405872	4.070363 2.875378	1.405872	2.875378
18 19	切片 X 値 1	-0.04687 2.140625	1.293734 0.230877	-0.03623 9.271725	0.973373	-4.16411 1.405872	2.875378	1.405872	2.875378
18 19 20	切片 <u>X 値 1</u>	-0.04687 2.140625	1.293734 0.230877	-0.03623 9.271725	0.973373	-4.16411 1.405872	2.875378	1.405872	2.875378

このままでは見にくいので、範囲を設定して、右クリックして「セルの書式設定」→「数 値」→「少数点以下の桁数」を「4」に設定すると、つぎのようになる。

	A	В	С	D	E	F	G	Н	Ι
1	概要								
2									
3	回帰	統計							
4	重相関 R	0.9830							
5	重決定 R2	0.9663							
6	補正 R2	0.9550							
7	標準誤差	1.6520							
8	観測数	5.0000							
9									
10	分散分析表	ž							
11		自由度	変動	分散	則された分散	有意 F			
12	回帰	1.0000	234.6125	234.61.25	85.9649	0.0027			
13	残差	3.0000	8.1875	2.7292					
14	合計	4.0000	242.8000						
15									
16		係数	標準誤差	t	P─値	下限 95%	上限 95%	下限 95.0%	上限 95.0%
17	切片	-0.0469	1.2937	-0.0362	0.9734	-4.1641	4.0704	-4.1641	4.0704
18	X 値 1	2.1406	0.2309	9.2717	0.0027	1.4059	2.8754	1.4059	2.8754
19									
00									
20									

「係数」のところには切片と傾きの値が示されている. 推定された回帰式は、次のようになる。

Y = -0.0469 + 2.1406X, $R^2 = 0.9663$

(-0.0362) (9.2717)

ここで、括弧内の数値はt値である。エクセルのアウトプットにある「重決定 R2」は授業中で説明した「決定係数(R²)」に対応し、回帰モデルの当てはまりの良さを示す。 決定係数は0から1の間の数値となり、1に近いほど当てはまりが良いことを示している。上の例では、R²=0.9663であり、当てはまりが良いことが分かる。

係数の欄のt値,p値は「H_o:係数が0である」という帰無仮説を検定するために用いられる。検定結果から帰無仮説が棄却できない,すなわち統計的に0でないとはいえない(0かもしれない)となると,YとXの関係がないことになり,説明変数を含める意味がなくなってしまう。この検定は「有意性の検定」と呼ばれる。判断の仕方は以下の通りである。

(方法1) p 値<分析者が設定する有意水準 → 帰無仮説を棄却

(方法2) 検定統計量(t)の絶対値(|t|)>分析者が設定した有意水準に対応す るt分布の臨界値 → 帰無仮説を棄却 P値が求められている場合には、(方法1)で判断するほうが簡単である。上の例では、 Xの p 値は 0.0027 と得られているので、0.0025<0.05 より、有意水準5%で「X の係数は0である」という帰無仮説は棄却され、Xは有意な説明変数であることがわ かる。

参考1:

t分布の確率値は、tdist 関数を用いて得ることができる。\$tdist(x,自由度,尾部) \$ ここで、x は、t 分布を計算する数値を指定する。自由度は、分布の自由度を整 数で指定する。尾部は、片側分布を計算するか両側分布を計算するか、数値で指定 する。尾部に1を指定すると片側分布の値が計算され、2を指定すると両側分布の 値が計算される。上の例では、x の値は9.2717であり、自由度は3、尾部は両側 検定(2)であるので、tdist(9.2717,3,2)=0.0027が得られる。

参考2:

t 分布の臨界値は、tinv 関数を用いて得ることができる。 \$tinv(有意水準、自由 度) \$ ここで、有意水準には多くの場合, 5%(0.05), 1%(0.01)といった値が用い られる。単純回帰モデルでは、自由度には、「n-2」の数が入る。ここで、n はサンプ ルサイズである. ここで、tinv 関数から得られる数値は両側検定のものである点に 注意する必要がある. 片側検定の値を求める場合は, 引数に用いる有意水準を 2 倍する必要がある。例えば、5%片側の数字の場合は, 0.1 となる。上の例では、X のt値は 9.271 であり、自由度は3である。tinv(0.05,3)=3.182 より、|t値|> 3.182 より、「x の係数が0である」という帰無仮説は棄却され、x は有意な説明変数 であることがわかる。